



薬局通信 第124号



大阪母子医療センター

新規試用または採用、採用区分が変更になった医薬品一覧

新規試用医薬品	新規院外専用医薬品
① エネフリード輸液 550mL ② ソグルーヤ皮下注 15mg ③ ゴービック水性懸濁注シリンジ ④ バクニューバンス水性懸濁注シリンジ	① ファロム錠 200mg ② マンジャロ皮下注 2.5mg アテオス ③ マンジャロ皮下注 5mg アテオス ④ シルムロ配合錠 HD「JG」
新規採用医薬品	
① レボセチリジン塩酸塩 DS 0.5%「杏林」 ② ラリキシンドライシロップ小児用 20% ③ 日本薬局方 ブドウ糖	
新規患者限定医薬品	
① メンクアッドフィ筋注 ② 小児用ヌーカラ皮下注 40mg シリンジ ③ ソグルーヤ皮下注 15mg ④ ユルトミリスHI点滴静注 300mg/3mL ⑤ フィアスブ注 ペンフィル	

採用薬品の処方開始は、原則として**2024年5月31日(金)**からになります。

ただし、採用中止薬、切り替え等は院内在庫薬がなくなり次第実施となりますので開始日が異なる場合があります。

新規試用医薬品

① エネフリード輸液 550mL 処方箋医薬品

(大塚製薬株式会社) アミノ酸・糖・電解質・脂肪・水溶性ビタミン液

一般名：アミノ酸・糖・電解質・脂肪・ビタミンキット

採用理由

本剤は脂肪が含まれており、脂肪製剤を投与するためのルートを確認する手間を省くことができるため。

効能効果

- 下記状態時のアミノ酸、電解質、カロリー、脂肪酸、水溶性ビタミン及び水分の補給
 - ・ 経口摂取不十分で、軽度の低蛋白血症又は軽度の低栄養状態にある場合
 - ・ 手術前後

用法用量又は使用方法

通常、成人には 1 回 550mL を末梢静脈内に点滴静注する。投与速度は、通常、成人 550mL 当たり 120 分を基準とする。なお、症状、年齢、体重に応じて適宜増減するが、最大投与量は 1 日 2200mL までとする。

処方区分：院内処方可

長期投与の可否：対象外

薬価：1,036 円/キット

② ソグルーヤ皮下注 15mg 処方箋医薬品

(ノボルディスクファーマ株式会社) アミノ酸・糖・電解質・脂肪・水溶性ビタミン液

一般名：ソマブシタン(遺伝子組換え)キット

採用理由

現在採用している 5 mg と 10 mg では、体格が大きい児の場合、10 mg を超えるため 1 回に 2 キット使用する必要があるため。

効能効果

- 骨端線閉鎖を伴わない成長ホルモン分泌不全性低身長症

用法用量又は使用方法

通常、ソマブシタン（遺伝子組換え）として 0.16 mg/kg を、週 1 回、皮下注射する。

処方区分：院内処方可

長期投与の可否：対象外

薬価：76,753 円/キット

③ ゴービック水性懸濁注シリンジ 処方箋医薬品 / 劇薬 / 生物由来製品

(一般財団法人阪大微生物病研究会/田辺三菱製薬株式会社) ワクチン・トキソイド混合製剤

一般名：沈降精製百日せきジフテリア破傷風不活化ポリオヘモフィルス b 型混合ワクチン

採用理由

今まで 4 種混合ワクチンと Hib ワクチンの 2 回接種だったが、本剤であれば 1 回接種となる。ただし現在 4 種混合ワクチンと Hib ワクチンを接種した患者はゴ-ビ-ックへの切り替えが原則できないため、当面 4 種混合ワクチンと Hib ワクチンと併存し、これらワクチンの使用量がある程度減った時点で患者限定薬へ切り替えたい。

効能効果

百日せき、ジフテリア、破傷風、急性灰白髄炎及びインフルエンザ菌 b 型による感染症の予防

用法用量又は使用方法

○初回免疫

小児に通常、1 回 0.5mL ずつを 3 回、いずれも 20 日以上の間隔をおいて皮下又は筋肉内に接種する。

○追加免疫

小児に通常、初回免疫後 6 か月以上の間隔をおいて、0.5mL を 1 回皮下又は筋肉内に接種する。

処方区分：院内処方可

長期投与の可否：対象外

薬価：自費

④ バクニューバンス水性懸濁注シリンジ 処方箋医薬品 / 劇薬 / 生物由来製品

(一般財団法人阪大微生物病研究会/田辺三菱製薬株式会社) ワクチン・トキシイド混合製剤

一般名：沈降精製百日せきシフテリア破傷風不活化ポリオヘモフィルスb型混合ワクチン

採用理由

今までの小児肺炎球菌ワクチンより 2 つ多い血清型を加えることができるため。

効能効果

○高齢者又は肺炎球菌による疾患に罹患するリスクが高いと考えられる者における肺炎球菌（血清型 1、3、4、5、6A、6B、7F、9V、14、18C、19A、19F、22F、23F 及び 33F）による感染症の予防

○小児における肺炎球菌（血清型 1、3、4、5、6A、6B、7F、9V、14、18C、19A、19F、22F、23F 及び 33F）による侵襲性感染症の予防

用法用量又は使用方法

○高齢者又は肺炎球菌による疾患に罹患するリスクが高いと考えられる 18 歳以上の者における肺炎球菌による感染症の予防

1 回 0.5mL を筋肉内に注射する。

○肺炎球菌による疾患に罹患するリスクが高いと考えられる 18 歳未満の者における肺炎球菌による感染症の予防

1 回 0.5mL を皮下又は筋肉内に注射する。

○小児における肺炎球菌による侵襲性感染症の予防

- ・初回免疫

通常、1 回 0.5mL ずつを 3 回、いずれも 27 日間以上の間隔で皮下又は筋肉内に注射する。

- ・追加免疫

通常、1 回 0.5mL を 1 回、皮下又は筋肉内に注射する。ただし、3 回目接種から 60 日間以上の間隔をおく。

処方区分：院内処方可

長期投与の可否：対象外

薬価：自費